

5章

子どもの体験、内側からの表現を大切に作る時間と空間

—シュタイナー教育、森の幼稚園の教育、ドイツ生活からの一考—

野沢 綾子

(ホリスティック・コネクション代表、ドイツ在住)

はじめに

エコ先進国ドイツに来てから、便利さや速さを犠牲にしてもそれを守ろうとするエコやロハスの高い市民意識や、インフラの整備に驚かされることが多い。長期的な視点が培われている社会において、そのなかで育つ子どもたちに対する教育への影響を日々、目にする。シュタイナー教育、森の幼稚園など、子どもが体験を自分でかみ含み熟させていくプロセスが大切にされている教育や生活環境のなかで、キラキラ輝くようにいきいきしている子どもたちを見ていると、スピードの速さと情報過多など、外界からの刺激の強さによって熟成のプロセスをとりあげてしまうことが、いかに警鐘に値するかということに改めて気づかされる。

子どもたちが自分たちのリズムで学んでいくということは、大自然の一部として、「いのちの曼荼羅」の一部として自分たちを体験しているということである。自然と共に呼吸をしているということだ。自分が受け入れられているという自己尊厳は、こうして少しずつ積み重ねられていく。こういった体験なくして、環境教育や自己尊厳に重きを置こうとしても、子どもたちの体にそれらが染み入るには、かなり時間がかかるか、単に無理強いになってしまう。子どもたちのリズムに合わせたほうが、遠回りに見えても、実は近道なのである。

こうした体験をじっくり自分のものとして味わう“内在化”の積み重ねの中で、内側からの衝動として発生してくる表現力は、子どもたち一人一人の

「これが私」という表明である。その表現は力強く、ストレートである。その表現の積み重ねは、自己尊厳にもとづく自己表明となる。まるで大地にしっかりと根をはやした木が、大自然のリズムでのびのびと育っていくようでもある。

自然農で育った作物のほうが、人間の手によって加工されたものより、形にでこぼこはあっても、彩りや艶があり、何より味わいがあり、しかも、腐りにくいという。自然のリズムで子どもたちがめいっばいの体験をし、その体験を内側からの衝動として表現できる時間と空間を守ること。外界から与えられる刺激の多いスピード社会では特に、対人援助にかかわる全ての関係者にとって、こういった環境を守り、提供することが不可欠の課題である。

外国がよくて、日本は見習うべきという単純な見方に陥ることなく、お互い学べることは学び合えるとよいといった視点で、ドイツでの体験、シュタイナー教育、森の幼稚園の教育に関する考察を、ここに提示してみたい。

長男のアートから

体験が内在化されて表現することの強さは、日々子どもと接する中から学ぶ。ことに幼少時や外国暮らしなど、言語のみの表現に制限があるとき、アートを媒介とする言語を越えた表現から学ぶことは多い。言葉では表せられない世界を垣間見るようで、そのストレートさからは、子ども時代に培われる体験の大切さ、そして同時に、言語以外の表現媒体があることの有効性を思い知るのである。

例として、ここに長男（シュタイナー小学校の一年生）がつくったアートを紹介してみたい。ふだんは、学校での様子をきいても「忘れた」と言うことのほうが多く、雲を掴むような思いをする。6歳直後のクリスマス・パーティで、ドイツの子どもたちが冬の夜、外を練り歩くときによく使う、筒状のラティアネ（提灯）の工作をした。そのとき長男が、茶色のセロハンを切って、ティピ、弓矢をかつく先住民の男性、そして、その先に鹿をかなり細かく表わしたのを見て、幼少時に暮らしたカナダ時代に見ていた先住民のパウワウ（踊りの儀式）や、ドレスデンで毎年行なわれる北米の先住民フェス

ティバル（カール・マイ・フェスト）で観察したもの、体験していたことが表れていることに驚いた（写真1）。

また、町のフェルト・クラブで、手作りの黄色の財布（横幅20cm程）を作ったときには、それは、人が焚き火（しかも木々の上には青い火と赤い火がある）に木を投げ入れるデザインをとっていた（写真2）。それを見て、今まで野外キャンプや、友人のところでもよく行なったキャンプ・ファイヤーで、長男が嬉々としてよく小さな丸太を投げ入れていた様子が思い出され、その積み重ねが表れてきたことがわかった。言葉でコミュニケーションできない幼少時の深い印象が内在化されて、アートとして表現されたというわけである。



写真1

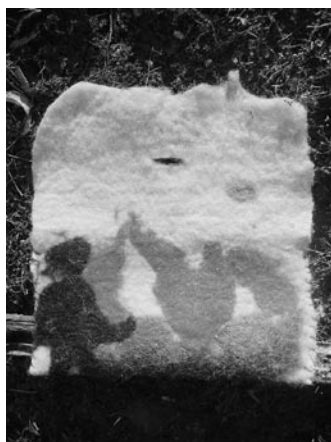


写真2

シュタイナー教育の例から

体験を内在化させた後、内側からの衝動として表現することは、シュタイナー教育では一貫して大切にされ、その体験を外部からの刺激にとってかわらせないという方針がいたるところで見受けられる。

長男が2年間通ったシュタイナー幼稚園（ドレスデンには全部で6園ある）では、庭に二つのブランコ以外には、きらびやかな遊具はなく、木々、花壇、石で囲まれた角のない砂場、ロープでつくられた簡素な遊具がある程度であった。幼稚園に迎えに行ったとき、子どもたちの様子を観察していると、追いかっこや木登り以外にも、砂場では山をつくり、木を立て、花をさし、川やトンネルや家をつくったり、協力して太い木の枝を組み立てて真剣にな



写真3

って大きな造形物をつくったりと、いわゆるふつうの砂場遊びよりはかなり創造的なことをして驚いた(写真3)。息子は、大きな石の上に別の石を置き、違う石で打ち割って、断面が光るものを集めてはポケットいっぱいに入れて持って帰っていた。

幼稚園の室内も、木のイスとテーブルの他に、アンティークの引き出しの上の季節のデコレーション、蜜蝋クレヨンやブロックの絵の棚、エナメルのおなべやコップ、お皿の木の棚、ブロック型の積み重ねのできる低いイスや座布団、色とりどりのコッ

トンの布が置かれていた。子どもたちは、人形劇用の木の台や、イスを組みたて、やわらかい色の布を結んだり、かけたりして、お家をつくってよく遊んでいた。そこにあるのは、体を使って学ぶ幼児期の子どもたちに合った自然素材で感触のいいもの、またシンプルで内的イメージを膨らますことのできるものばかりであった。

手でものをつくることは、とても重要視されていたため、自分たちで石鹸をつくったりした。幼稚園のそばの森には、園児がよく遊びに行っていたが、「森に行こう!」と息子に誘われて散歩をすると、倒れた木の幹に誰だれと上ったとか、ここでスナックを食べたとか、得意げになって教えてくれるのを見て、森の一つひとつの体験がすでに染み込んでいるのだと感じた。

季節の移り変わりや行事を大切にするため、シュタイナーの幼稚園でも小学校でも、季節感の考えられた自然のものが室内に飾られている。どんぐり、松ぼっくり、森のコケから、羊毛で丁寧に手づくりされた素朴な人形や動物が飾られている。その人形を操りながら、先生がお話を毎日少しずつするのだとか。顔がしっかりかかれていないシンプルな自然素材の人形には、子どもたちが先生の話聞きながら、自分でイメージする力を養えるようにするという意図がある。与えられたイメージを消極的にとり入れるのではなく、

自分のイメージを積極的に膨らませることができるように、絵本よりも、大人の語りによる話が重視されている。

季節を飾る祭りもほのぼのとしていて、夏祭りなどでは、家庭でつくった花冠をかぶった卒園生をはじめ、子どもも大人も一緒になって、歌を歌いながら手を取りあ



写真4

って踊ったり、持ち寄りの食べ物に口をほおばらせたり、花のついたワゴンをひいたり、麻布袋のジャンプ競争で笑いあったりしながら楽しく時をすごす（写真4）。

小学校入学の前には、毎週、年長の子どもたちが連れ立って、ドレスデナーハイデといわれる大きなドレスデンの森に2、3時間はハイキングに行っていた。これは体力的にも、精神的にも、新たな「旅立ち」に備えるものだった。もちろん、道々、先生や友だちと話をしながら、色々な発見をしながらの冒険でもある。これらが、とても深いところで働いて、いいものを引き出してもらってきたと感じている。

森の幼稚園の例から

このドレスデナーハイデには、「ヴァルド・キンダーガーデン（森の幼稚園）」（Waldkindergarten）が2箇所ある。ドイツでは1968年に開園されて以来、森の幼稚園は、400以上にも増えてきた。森の幼稚園は、森から学ぶ究極の環境教育ともいえるが、もとは1950年代にデンマークで始まった幼稚園である。「自然は何よりの学びの場」ということで、校舎がなく、夏でも、零下の真冬でも、雨でも雪でも、子どもたちは森の中で一日中すごす。一年を通じ、園児たちは季節感あふれる毎日をすごし、森の中の新鮮な空気をすい、十分な運動により帰宅後はボタンキューで寝てしまうという。いたって健康的である。



写真5

先生の役割は、あくまで子どもたちからの質問に答えること、子どもたちの周りにいて、いざという時に備えることが中心で、子どもが何かをしているときには、極力手助けをしないで見守っているのだという。私が訪ねた森の幼稚園のひとつでは、朝8時に集まり、サークルタイム、ランチ、昼寝（小屋の

ようなところでしていた）以外は、森に手を加えないことを原則に、各自が自然からインスピレーションを得て、想像力のおもむくまま、一日を思い思いに遊んで（学んで）いる。

グループで探索に行くことも時にはあるのだろう。地面に、森の幼稚園の園児たちがつくった花時計のようなもの（写真5）を見つけたことがある。松の木々の林の中、ぽっかりと開いた砂地に、木切れや花や石など、自然のものでつくられた半径2mほどの円形の模様で、長男が、森の幼稚園の子たちがつくっていたと教えてくれた。残念ながら、森の小学校がないので、卒園生はシュタイナー学校に行くことが多いときいた。

こうしてシュタイナー幼稚園や森の幼稚園の子どもたちは、ドイツ特有の森とかかわりを深めていく。森に深く分け入ると、リスはもちろんのこと、鹿、いのししなどの野生動物に出会うことも多々あるが、日本では思い描けなかったグリム童話の「赤ずきんちゃん」などに出てくる森のイメージが、ここにきてよくわかった。

『ピースフルな子どもたち』のなかで、竹村氏がかかれていた「森はいのちの曼荼羅」という概念を思いだした。昔は、森に入っているいろいろな体験を重ね、またコミュニティの中できり返し、くり返し、話を伝えきくなかで「いのちの曼荼羅」が子どもたちの中にも深く育まれていったのであろうが、現在では、大人の努力と工夫が必要となっている。

シュタイナー幼稚園でも感じたが、木切れや石を集めたり、木登りをしたりしている子どもたちの様子は、遊んでいるというよりは、瞑想状態のようで、穏やかだ。曼荼羅の一部になっているのである。一人で遊んでいると、友だちがいなくて心配するのは親心かもしれないが、一人でじっくりと体験を内在化させる時間があるのもよい。子どもにとっては、自然とのかかわりや、一つひとつの遊びの行動自体が、内在化された表現でもあるのだと、つくづく感じられる。

そういった体験の積み重ねのなかで培われたものが、内側の衝動として表現されたときの強さ—それは、シュタイナー学校で素朴な話を聞きつづけた児童が、自分の内側から表わしていく、教科書代わりのエポックノートにも伺える。同じプロセスだが、これは学年があがるにつれて洗練されていく。私は、こういった表現ができる時間と空間の大切さを痛感している。

ドイツの生活—子どもの自然とのかかわり

子どもの体験や表現のできる時間と空間の大切さは、教育現場以外の生活でも適用されていないと意味がない。環境先進国ドイツでは、工業化にしたがって森林伐採が進んだ際、危機感を感じた庶民が立ちあがって植林が始まり、いたるところで蘇っていった森の話が有名だ。ドイツの人々にとって森はかけがいのないものである。日本なら、里山的存在ということだろうか。ドイツは日本とほぼ同じ大きさでありながら、国土80%以上が平地や丘陵地帯で、散歩に適したような森がたくさんあるので、森の散策は暮らしの中の一部だ。



また、家族を大切にしている旧東ドイツのドレスデンの人々は、夕方や週末よく家族と時間を共にし、シンプルなことをうまく楽しむ。もちろん、旧西側に追いつくと、消費生活に拍車



はかかっているが、遅くても20時（最近は21時のところも）には店はしまり、日曜日は全店休業。年間5-6週間の休暇には、家族でのんびりと郊外でキャンプをしたり、旅行をしたり…。ドレスデンでは、友人や親戚とのつながりがまだまだ強く、いまでも森の散策や、河原のサイクリングやピクニックをしたり、あるいは、小さな菜園と小屋のあるクライン・ガルテンで週末家族や気のあった友人一家と畑仕事やBBQ、宿泊をしたりして、自然とのかかわりが人々の生活にふかく馴染んでいる。

日常生活でも、自転車通勤・通学をはじめ、アウトドア活動を心がける人たちの比率が高い。オーガニックの農地や農作物・商品を目にすることが多かったり、一般的な家庭でホメオパシーなどの自然医薬品を用いたり（普及率70%程）する。暮らしのあらゆる面で、便利さや速さを少し犠牲にしても、エコやロハスへの市民意識が高く、そのためのインフラの整備には目をみはるばかりだ。こういう環境のなかでこそ、大人も子どもも、自然とかわれる時間や空間が守られている。

シュタイナーが7歳までの学び方が「模倣」だと言ったことが思い出される。子どもは、社会のなかで生きる親の背中を見て育つ。こういった積み重ねがすべて子どもの体験となって内在化していくとしたら…？

子どもの体験は何も生まれてからだけではない。実際、おなかの中から始

まっている。マタニティ・ヨガの参加者が、ヨガ・クラスで聞いていた音楽を、お子さんが大きくなっていきなり口ずさんで驚かれるとよく言われる。私が教えているクンダリーニ・ヨガでは、マントラ（古いインドのことばで意味のある音の繰り返し）を使って、その音の波動でさらに効果が高められる。参加者は、他の参加者、おなかの中のいのちと共に、からだのメッセージに耳を傾けながら、ゆったりとした時間と空間を共有する。これも「いのちの曼荼羅」にチューニングしているという意味では、自然の中にいる生きた体験と同じである。日本人の参加者の、最近3歳になった日独のバイリンガルのお子さんが、胎教のように聞いていたマントラを最近、毎朝のように歌うようになったと言われた。言葉を越えて、からだに染み込んでいた言霊のようなものが、時を経て内在化されて、今度は歌という媒体となって体现された。これも言葉を越えた表現といえないだろうか。

最後に

便利になってきた現代社会では、概して、速いということに重要性が置かれ、その必然として、生活全体のスピードが増す。子どもたちの中でADHDが多くみられているが、これが子どもたちの体験の表現だとしたら、薬で治療するというレベルのことだけではないことがわかってくる。それは、いまの社会の表れでもある。敏感に感じる子どもたちが今の社会を照らしだして、大人たちに見せてくれているかのようだ。スピードの速さと情報過多など、外界からの刺激の強さによって、体験が十分に染み込んで、時を熟してから外に表れ出てくる以前に、生きた体験の内在化のプロセスそのものが妨げられてはいないだろうか。

日々、子どもの目の輝きを、「早く！」という言葉でとりあげてしまっていないかと、対人援助にかかわる私たち一人ひとりが自分に繰り返し問いかけ続けていなくてはならない。子どもの体験・内側からの表現を大切にする時間と空間を守るということは、日々の一つ一つの行為から始まる。つき詰めれば、それは「早く、早くというスピードより、熟成が大切」という、自然のリズムへの絶大なる信頼が自分のなかできているのかという問いかけ

につながっていく。それは一瞬一瞬の、勇気ある決断の積み重ねである。

〈参考文献〉

日本ホリスティック教育協会編（2004）ピースフルな子どもたち．せせらぎ出版．
野沢綾子（2008）暮らし ホリスティック．せせらぎ出版．